

E S D（持続発展教育）としての音楽科教育 —中学校鑑賞領域の場合—

宮 下 俊 也 奈良教育大学大学院（教職開発講座）
大 熊 信 彦 文部科学省・国立教育政策研究所

（平成25年5月7日受理）

School Music Education as Education for Sustainable Development (ESD) : Possibility in the Area of Junior High School Music Appreciation

Toshiya MIYASHITA

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

Nobuhiko OHKUMA

(Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology / Institute for Educational Policy Research)

(Received May 7, 2013)

Abstract

Education for sustainable development (ESD) is an extremely important educational measure for developing the human resources of today and tomorrow. Naturally, school music education as a form of art education needs to be promoted as ESD, and is more than capable of achieving sustainable development. At present, however, there are only a few cases where school music education is being practiced as ESD, and the very idea of “school music education as ESD” is beyond the awareness of researchers or teachers.

The aims of this paper are twofold: (1) to recognize “competencies and attitudes required for ESD” as the goals accomplished through instruction in the area of junior high school music appreciation and clearly specify those goals as well as the stages to reach them, and (2) to suggest example themes that learners will be encouraged to think about, by taking note of “cogitation” as a means for students to acquire the specified “competencies and attitudes required for ESD”.

Some of the “competencies and attitudes required for ESD” derived from the study include a “competency in perceiving abstractions such as music and artworks through both objective perception and sensitivity,” “competency in communicating one’s own imaginings and emotions to others and in responding to those of others for mutually harmonious communication,” and “competency in making apt criticisms for the creation and sustainable development of a diverse range of cultures, including art.” In addition, themes that learners are encouraged to think about were conceived, such as “Let’s determine the elements of music that can empower those in distress by recalling our own experiences while listening and then discussing our thoughts with other students.”

キーワード：E S D（持続発展教育）、音楽科教育、音楽
鑑賞、ソウル・アジェンダ

Key Words: ESD(Education for Sustainable Development),
School Music Education, Music Appreciation,
Seoul Agenda

1. はじめに

1.1. 問題

教育において音楽は感動の対象であり、思考の対象である。大震災に見舞われ、資源が乏しい我が国において「人材こそが資源」であることがあらためて強く認識される中で、学校における音楽教育（音楽科教育）は、感動と思考を伴ってどのような人材を育成しなければならないのだろうか。また、音楽科教育で身に付けた学力は、これからの社会づくりに対してどのような貢献を果たすものなのだろうか。

今日と未来に生きる人材育成として、「現代的、社会的な課題に対して地球的な視野で考え、自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手」⁽¹⁾を育成するE S D（持続発展教育）は、我が国や世界の教育において必要不可欠であることに疑いをもたない。芸術教育としての音楽科も当然、E S Dとして推進していく必要があり、またその可能性を十分にもっている。それは、文部科学省がE S Dで育みたい力として掲げた「体系的な思考力」「持続可能な発展に関する価値観」「代替案の思考力」「情報収集・分析能力」「コミュニケーション能力」⁽²⁾は、環境教育やエネルギー教育等とは異なる、音楽科教育がもつ特質からもアプローチできると考えるからである。しかしながら、現在のところE S Dとしての音楽科の実践はごくわずかであり、研究者においても実践者においても「E S Dとしての音楽科教育」という意識そのものがもたれていない⁽³⁾。その原因として次の3点が予測される。

第1は、あえてE S Dを意識しなくても、音楽科が果たす役割にはE S Dの理念や目的と重なるところがあると捉えられる点。例えば「音楽を愛好する心情」を育てれば生活が明るく豊かなものになる、「音楽文化についての理解」を深めれば音楽の多様性や異文化を理解し尊重する態度が養われる、我が国の伝統音楽を学習すれば伝統文化の尊重と継承の意義が理解できる、といった自明視である。第2は、音楽科で育成した学力が持続可能な社会づくりのための行動力となって実現されるのは、音楽科教育を終えた後に予定調和として結実されていくものとして捉えられる点。第3は、それらゆえ、音楽科の指導内容をE S Dと関連付けて教えるという発想が生まれにくい点。例えば「音楽を愛好する」ということが人生においてどういう意味をもつのか、多様な音楽文化や伝統音楽を学ぶことで具体的に持続可能な社会づくりにどう貢献できるのか等を、考え、理解させ、行動化を図る学習が授業において展開されていない。

これらは、音楽科で指導する内容一つ一つの本質的な意味にも関わる。すなわち、なぜ歌うのか、なぜ聴くのか、なぜ〔共通事項〕を教えるのか、といった意味であ

る。そしてその一つ一つの意味は、少なからず持続可能な社会づくりのために行動できる力の育成に繋がっているはずだ。しかし、その繋がりを明確にして指導しない限り、そして予定調和に期待している限り、E S Dとしての音楽科教育は果たせない。

E S Dとして音楽科が担えることは、我が国においては「教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）」（2013）の基本施策2-6の「伝統・文化等に関する教育の推進」⁽⁴⁾や、E S D-J（2006）がE S Dを通じて育みたい力として示した「自分で感じ、考える力」「問題の本質を見抜く力／批判的思考力」「気持ちや考えを表現する力」「多様な価値観をみとめ、尊重する力」⁽⁵⁾の育成、また国立教育政策研究所による「E S Dの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）」の7項目のうちのいくつかが該当する⁽⁶⁾。

一方、世界においてはユネスコが2010年に示した「ソウル・アジェンダ」（Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education）⁽⁷⁾に掲げられている項目、特にGoal 3の3 a「芸術教育によって、社会が潜在的にもっている創造性や革新性を高める」、3 b「芸術教育にある社会や文化の健全化を果たす特質を認識し、発展させる」、3 c「社会的責任、社会的結束、文化的多様性、異文化間対話を促進する上での芸術教育の役割を高め、それらを支援する」、3 d「芸術教育を通して、平和から持続可能性に至る主要な世界的課題に対応する能力を育成する」等と、それらの下位にある諸項目が該当する（資料1⁽⁸⁾参照）。

音楽科におけるE S Dは、新たな指導内容を設定しなくても、現行学習指導要領が示す指導内容が持続可能な社会づくりに貢献できる力の育成に繋がっていることと、その力の具体を明確化し、それを育成する指導方法を立案すれば実現をもたらすことができると考える。とりわけ鑑賞領域において新たに求められることとなった批評の能力や、音楽文化の多様性の理解は、E S Dとして扱うべき事項として強調されなければならないものと言える。

以上より、本論考はインフュージョン・アプローチ⁽⁹⁾として、中学校音楽科鑑賞領域に限定してこれらを検討し、結果を指導者に提供するものとした。それによって予定調和ではなく、授業においてE S Dが果たされていくことを期待する。

1.2. 目的

上記の問題をもとに、本論考の目的を以下の2点に定める。

- ① 中学校音楽科鑑賞領域の指導内容によって持続可能な社会づくりに貢献できる力を「E S Dとして獲得が期待できる力」と位置付け、その具体と獲得に

至るまでの段階を指導内容ごとに明示する。

- ② 明示した「E S Dとして獲得が期待できる力」を獲得させる方法として「思考」に注目し、学習者に思考させるテーマの例を提案する。

1.3. 方法

上記2点の目的に対し、それぞれ以下の方法をとってアプローチする。（ ）内は遂行者。

- ①-1 中学校学習指導要領音楽、及びその解説で示されている記述をもとに、鑑賞領域における具体レベルの指導内容を明示する。（宮下）
- ①-2 それらの指導内容によって求める学力を踏まえ、同時にE S Dの視点で指導内容を検討し、その学力を身に付けることによって期待できる持続可能な社会づくりに貢献できる力、すなわち「E S Dとして獲得が期待できる力」の具体を導く。（宮下）
- ①-3 各指導内容と、「E S Dとして獲得が期待できる力」の関係が妥当しているかどうか、獲得までの段階を示して検証する。段階は、その指導内容が求める学力の基盤となるレベルを「Basic Level」、音楽科として求める到達レベルを「Middle Level」、そして「E S Dとして獲得が期待できる力」のレベルを「Advanced Level」とする。この段階の繋がりが整合しているかどうかを検証のポイントになる。なお、この段階とAdvanced Levelの項目は、まず宮下が原案を作成し、それを大熊が行政の立場から妥当性と中学校段階に即して適切かどうかを確認する。検討においてはE S Dに関する先行資料、ソウル・アジェンダを参考にする。（宮下・大熊）
- ②-1 明示したAdvanced Levelを実現させるため方法として「思考」を取り上げ、授業で思考させる具体的テーマの例を宮下と大熊による協議によって決定する。協議では、中学校段階としての適切性や実践可能性を重視する。また思考については、ドイツベルリン州の音楽カリキュラムを参考にする。（宮下・大熊）

2. 中学校音楽科鑑賞領域の指導内容と「E S Dとして獲得が期待できる力」の関係

2.1. 鑑賞領域における指導内容の具体

中学校音楽科学習指導要領における鑑賞領域の指導事項は、第1学年、第2学年及び第3学年に共通する3項目があり⁽¹⁰⁾、加えて鑑賞学習の基盤となる〔共通事項〕の2項目が示されている⁽¹¹⁾。これらは次の8つの観点に基づくものである。①音楽の素材としての音、②音楽の構造、③音楽によって喚起されるイメージや感情、④音楽の鑑賞における批評、⑤音楽の背景となる風土や文

化・歴史など、⑥音楽の構造の原理、⑦音楽的な感受、⑧音楽を共有する方法⁽¹²⁾。

さらに、これらの観点に基づく具体的な指導内容として次のものが抽出できる⁽¹³⁾。

- ・音そのものの質感
- ・我が国や諸外国の音楽における様々な声
- ・音楽を成立させる言葉の特性
- ・楽器の音
- ・自然音・環境音
- ・音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質
- ・要素と音楽全体の構成
- ・要素や構造がもたらす曲想
- ・鑑賞によって得られる自己のイメージや感情
- ・イメージや感情の言語化
- ・自分にとっての音楽の価値判断
- ・人間と音楽との関わり
- ・他芸術と関わった総合芸術における音楽
- ・様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性
- ・音楽を共有するための音楽用語や記号

2.2. 「E S Dとして獲得が期待できる力」とそこに至る段階

上記の各具体的指導内容に対して基盤的な学力となるBasic Level、中学校音楽科鑑賞領域の到達レベルとして求めるMiddle Level、そしてその先に求めるべき「E S Dとして獲得が期待できる力」となるAdvanced Levelを、指導内容ごとに段階的に示しまとめたものが表1である。

2.2.1. Advanced Levelの要点

表1に示したAdvanced Levelの要点は、対応する指導内容についてBasic Level→Middle Levelの順を踏み、関連させながら育成しなければならないことである。それを怠ると音楽から得る感動、音楽の認識、音楽的感受といった音楽科の本質に関わる音楽経験と切り離された知識として求めてしまうことになる⁽¹⁴⁾。鑑賞領域の指導事項に「音楽のよさや美しさを味わうこと」が求められているように、認識や感受を通して音楽のよさや美しさに感動し、その経験を通してAdvanced Levelを獲得させていかなければならない。それが「道徳」や「総合的な学習の時間」とは異なる、教科としての音楽科でなくてはできないE S Dになる。

2.2.2. 国立教育政策研究所による提示例との関係

Advanced Levelに示した多くの項目は、結果的に国立教育政策研究所が提示した『「持続可能な社会づくり」の構成概念（例）】⁽¹⁵⁾（以下、構成概念）に相当するもの

となった。特に「人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念」の「環境」を「文化・社会」として焦点化させた場合、E S Dとして音楽科が果たせる人材育成がより鮮明になる。

例えば、「(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度」(表1③④⑤⑪)は、構成概念の「I多様性」に該当し、多種多様な楽曲や音楽文化が築き上げられてきた(いる)ことを知り、それを尊重することによって(音楽)文化を持続発展させるという趣旨をもつ。

また、「自己のイメージや感情を他者に伝え、他者のそれを受け止めて互いに協調的なコミュニケーションを図れる力」(同⑫)や「音楽を『ピースメイキング』として捉え、音楽が自分の生活や社会の健全化に貢献できることを理解し、そのために行動できる力」(同⑬)は、構成概念の「人(集団・地域・社会・国など)の意思や行動に関する概念」の「V連携性」や「VI責任性」に該当する。音楽鑑賞での学びや感動の経験が原動力となり、平和の創造や災害復興等のために行動できることを期待するものである。

3. 鑑賞授業においてE S Dを実現させるための思考とテーマ

各指導内容によって「E S Dとして獲得が期待できる力」、すなわちAdvanced Levelを実現させるためには様々な方法が考えられるが、とりわけ学習者に思考させることはそのための重要なものであると考える。例えば、過去に築かれた音楽文化や伝統を尊重しその持続発展に貢献しようとすることの重要性を教師が規範として論じても、知識として理解はするけれどもそれを行動に移せる力となるまでには至らないと考えるからだ⁽¹⁶⁾。

このことは、日本学校音楽教育実践学会の課題研究(2009)で報告されたドイツベルリン州の音楽科カリキュラム、「Rahmenlehrplan für die Sekundarstufe I」(「教授大綱」)中等段階(第7～10学年)(2006)における領域「音楽について思考すること」(Nachdenken über Musik)と、それに基づくベルリン州での実践⁽¹⁷⁾から示唆が得られた。

同カリキュラムの領域「音楽について思考すること」では、そのアプローチとして、①時代の変遷における音楽(歴史的テーマとして音楽を思考する)、②社会的文脈における音楽(社会的テーマとして音楽を思考する)、③様々な文化の音楽(民俗学的テーマとして思考する)、④他のメディアとの結びつきにおける音楽(マルチメディアからのアプローチによって思考する)、⑤形成された秩序としての音楽(作曲理論的に音楽について思考する)、⑥音楽の原理(知覚心理学的・自然科学的なテーマとして音楽を思考する)のように、テーマと思考させ

る内容が示されている⁽¹⁸⁾。また、同カリキュラムのシーケンスとして、年齢が高まるにつれて思考の比重が増していることも、我が国の中学校音楽科教育の今後を考える上で参考になる⁽¹⁹⁾。

ベルリン州のカリキュラムに基づく実践では、「西洋音楽史に何故こんなに違う時代があるのか」「どこから様々な様式が生まれたのか」「社会で自分が属している層によって聴く音楽のジャンルが異なるのはなぜか」「(人によって音楽の)好みが変わるのはどうしてか」等、人間と音楽、社会と音楽、自分と音楽、といった関わりについて思考させている⁽²⁰⁾。またこれらは、学習者同士のコミュニケーションをとり、話し合いなどの交流によって多様性と寛容性も身に付けさせようとしている⁽²¹⁾。

このようなテーマについて思考させ、思考の結果得られるものはE S Dで期待する能力・態度に一致する。よって、表1に示したAdvanced Levelの獲得には、思考、そして思考したことを基にした討論やプレゼンテーション等による学習者同士の交流が効果的な方法であると考えられる。

この考えに基づき、表1のAdvanced Levelを求めるための思考のテーマを検討し、表1に追記する。

4. まとめと今後の課題

4.1. 得られた成果

本検討により得られたことの第1は、音楽科も芸術教育の立場から持続可能な社会づくりに寄与する人材育成を十分に果たすことができる、という確証である。それは現行学習指導要領に示されている指導内容から「E S Dとして獲得が期待できる力」を導出できたことによる。

第2は、E S Dの視点をもった音楽科授業の立案と実践に寄与できる表1が構成できた点である。最近「E S Dの視点をもった〇〇教育」と銘打った実践報告が多くあるが、どこにそれが現れているのか、E S Dではない教育とどこが異なるのか、E S Dが「なんでもアリ」になってはいないか、という批判的指摘も多くある⁽²²⁾。表1は指導内容と「E S Dとして獲得が期待できる力」との繋がり、及びそこに至る段階がともに示されていることから、指導者にとって、音楽科の指導内容が含んでいるE S Dとして求める具体的内容と、E S Dとして扱う場合の指導の道筋がともに明確になるものと考えられる。

第3は、E S Dの方法として学習者への思考を求めた点である。表1に例示したテーマは単一の解答があるものではなく、個人の思考と学習集団において他者とコミュニケーションを取りながら共に議論することを求めるものとした。このテーマに取り組むこと自体も、人と関わり繋がることや、異なる意見を受け入れること、建設的な意見を主張し合うといった、E S Dそのものであると言える。

表1 中学校音楽科鑑賞領域の指導内容によりESDとして獲得が期待できる力・獲得までの段階・獲得のために思考させるテーマ

音楽の素材としての音	Basic Level		Middle Level		Advanced Level	
	指導内容	音そのものの質感	音における音そのものの質感の感受	音は音楽の素材であることの理解 ・長さ、高さ、強さ、音色など音の持つ性質の理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ①自分で感じ、考える力 ②感覚的な反応を発達させる力 【授業で思考させるテーマ例】 ・「全ての感覚を働かせて、ものをよく見、聴き、味わい、触り、嗅いでみて新たに発見したことと、その時に感じたことを述べてみましょう。」	【ESDとして獲得が期待できる力】 ③（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「同じ食べ物の匂いでも、国や地域によって好みが全く異なることがあります。『声についての美意識』もそうなのでしょうか。そうだとしたら、なぜ異なるのかを考えてみましょう。」
音楽の要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	我が国や諸外国の音楽における様々な声	・様々な声の知覚・感受	・曲種に応じて、固有の声質、声域、発声法、発声法、歌唱法があることの理解 ・声の多様性の理解 ・声の音色を手がかりにした作曲家・演奏者の表現意図についての思考と理解	・言葉の特性がもたらす音楽の特質の理解 ・言葉の特性からみえる音楽文化の多様性の理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語の音声を、音色や抑揚、リズム感に注目して聴き比べてみましょう。そしてそれぞれの違いを述べてみましょう。」 ⁽²³⁾	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑤（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「世界の諸民族の楽器を1つ取り上げ、その地域の自然や風土などから、その楽器の音がそこで暮らす人々に好まれる理由を考え、発表してみましょう。」
	音楽を成立させる言葉の特性	・音楽で用いられている言語の抑揚、アクセント、リズム、音質、語感などの知覚・感受	・言葉の特性がもたらす音楽の特質の理解 ・言葉の特性からみえる音楽文化の多様性の理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語の音声を、音色や抑揚、リズム感に注目して聴き比べてみましょう。そしてそれぞれの違いを述べてみましょう。」 ⁽²³⁾	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語の音声を、音色や抑揚、リズム感に注目して聴き比べてみましょう。そしてそれぞれの違いを述べてみましょう。」 ⁽²³⁾	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語の音声を、音色や抑揚、リズム感に注目して聴き比べてみましょう。そしてそれぞれの違いを述べてみましょう。」 ⁽²³⁾
	楽器の音	・様々な楽器の音の知覚・感受	・様々な楽器の音の知覚・感受	・楽器の材質、形状、形、発音原理、奏法による様々な音があることの理解 ・楽器の多様性の理解 ・楽器の音色を手がかりにした作曲家・演奏者の表現意図についての思考と理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「世界の諸民族の楽器を1つ取り上げ、その地域の自然や風土などから、その楽器の音がそこで暮らす人々に好まれる理由を考え、発表してみましょう。」	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「世界の諸民族の楽器を1つ取り上げ、その地域の自然や風土などから、その楽器の音がそこで暮らす人々に好まれる理由を考え、発表してみましょう。」
	自然音・環境音	・自然音・環境音の知覚・感受	・自然音・環境音の知覚・感受	・自然音・環境音に対する多様な美意識の理解 ・自然音・環境音と音楽の関わり方の理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「日本人が大切にしてきた音や音環境を調べてみましょう。そしてなぜ大切にしてきたのかを考え、これからの音環境を保全するために、私たちができることは何かを話し合ってみましょう。」	【ESDとして獲得が期待できる力】 ④（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「日本人が大切にしてきた音や音環境を調べてみましょう。そしてなぜ大切にしてきたのかを考え、これからの音環境を保全するために、私たちができることは何かを話し合ってみましょう。」
音楽の構造	音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	・要素及び要素同士の関わり方に対する知覚・感受	・客観的知覚と感受の両側面による音楽の認識	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑦音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を客観的知覚と感受の両側面から認識できる力 ⑧事物や事象を客観と主観によって捉え、考える力 【授業で思考させるテーマ例】 ・「最近『美しい』と感じたモノやコトを取り上げ、なぜ『美しい』と感じたのか、その理由を述べ合ってみましょう。」 ・「『客観』と『主観』という語の意味を調べ、身の回りにあるものを1つ選び、それについて客観と主観によって捉えた結果を語り合ってみましょう。」	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑦音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を客観的知覚と感受の両側面から認識できる力 ⑧事物や事象を客観と主観によって捉え、考える力 【授業で思考させるテーマ例】 ・「最近『美しい』と感じたモノやコトを取り上げ、なぜ『美しい』と感じたのか、その理由を述べ合ってみましょう。」 ・「『客観』と『主観』という語の意味を調べ、身の回りにあるものを1つ選び、それについて客観と主観によって捉えた結果を語り合ってみましょう。」	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑦音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を客観的知覚と感受の両側面から認識できる力 ⑧事物や事象を客観と主観によって捉え、考える力 【授業で思考させるテーマ例】 ・「最近『美しい』と感じたモノやコトを取り上げ、なぜ『美しい』と感じたのか、その理由を述べ合ってみましょう。」 ・「『客観』と『主観』という語の意味を調べ、身の回りにあるものを1つ選び、それについて客観と主観によって捉えた結果を語り合ってみましょう。」

	要素と音楽全体の構成	<ul style="list-style-type: none">音や要素の働きから生まれる様相の理解要素間の関わりによって生まれる様相の理解音楽の構成や展開の様相の理解	<ul style="list-style-type: none">部分と全体の両側面による音楽の認識	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑨音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を、部分と全体の両側面から認識できる力 ⑩事物や事象を多面的・総合的に捉え、考える力 【授業で思考させるテーマ例】 <ul style="list-style-type: none">「印象派の音楽と、印象派の絵画に共通するところはどこかを見つけ出し、発表してみよう。」「いろいろなパートが組み合わせられて美しさを生み出しているモノやコトを探してみよう。そしてどのような組み合わせ方に美しさを感じたのか、発表してみよう。」
音楽によって喚起されるイメージや感情	要素や構造がもたらす曲想	<ul style="list-style-type: none">それぞれの音楽固有の表情や雰囲気などの感受	<ul style="list-style-type: none">曲想からみえる音楽の多様性の理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑪（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 <ul style="list-style-type: none">「いろいろな国の代表的な音楽を聴いて、表情や雰囲気をを感じ取りましょう。そして、音楽の特徴について、その国に対するイメージなどと関わりながら考え、話し合ってみよう。」
音楽の鑑賞における批評	鑑賞によって得られる自己のイメージや感情	<ul style="list-style-type: none">音楽によって喚起される自己のイメージの創出と感情やその変化の自覚	<ul style="list-style-type: none">創出したイメージと自己の感情やその変化の音楽的要因の探索音楽が人間の感情に変化をもたらし特質をもつものであることの理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑫自己のイメージや感情を他者に伝え、他者のそれを受け止めて互いに協調的なコミュニケーションを図れる力 【授業で思考させるテーマ例】 <ul style="list-style-type: none">「人によって感じ方が大きく異なると思われる音楽や芸術作品を探し、皆に提示して感じたことを尋ね、その感想を共感的に受け止めて言葉で返してみよう。」
	イメージや感情の言語化 自分にとつての音楽の価値判断	<ul style="list-style-type: none">イメージや感情の変化とその要因の言語化価値判断の根拠となる音楽の認識とイメージや感情の変化の自覚	<ul style="list-style-type: none">言語化された他者のイメージや感情の理解客観的な根拠を携えた音楽の価値判断価値判断した結果の表現	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑬音楽や芸術の本質（自分や社会にとつての価値）を積極的に考え、見抜き、その結果を語り合える力 ⑭音楽や芸術を含む様々な文化の創造と持続発展のために、的確な批評ができる力。 ⑮社会に存在する事物や事象の価値を的確に判断し、建設的に主張できる力 【授業で思考させるテーマ例】 <ul style="list-style-type: none">「ベートーベンの『運命』が200年以上も演奏されている理由を考えてみましょう。また、最近生まれたJ-POPがこの先200年以上演奏され続けるかどうか、それぞれの音楽を批評しながら考え、発表してみよう。」「友人や家族が好きな音楽を発表し、その作品を皆で鑑賞しながら、どのような価値を見出しているか話し合ってみよう。」「私たちが音楽や芸術を鑑賞することに役割があるとしたらそれは何でしょうか。話し合ってみよう。」

音楽の背景となる風土や文化・歴史など	人間と音楽との関わり	・音楽とその背景にある風土 ・文化・歴史、人間の生活との関わり の理解	・人間にとっての音楽の存在価値の理解 ・社会における音楽が果たしてきた人間についての思考と理解	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>①⑥自分と音楽、人間と音楽との関わりに関心を持ち、音楽文化を尊重する態度</p> <p>①⑦音楽を「ピースメイキング」⁽²³⁾として捉え、音楽が自分の生活や社会の健全化に貢献できることを理解し、そのために行動できる力</p> <p>①⑧社会に存在する事物や事象の背景を洞察できる力</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人はなぜ表現するのかを考え、話し合ってみよう。」 ・「心が傷ついた人々に勇気を与える音楽は、どのような要素によってつくられた音楽か、自分の経験をもとに、音楽を聴いて確かめながら考え、話し合ってみよう。」 ・「知らない曲を皆で聴き、その作曲者の性格、育った環境、趣味などを想像し、理由とともに述べ合ってみよう。」 ・「世界で起こっている紛争や戦争をなくすために、音楽や芸術が果たせることを考え、話し合ってみよう。」
	他芸術と関わった総合芸術における音楽	・総合芸術の理解	・他芸術と関わる音楽が、人・モノ・コト・社会・自然とのつながり・ひろがりのもとに生まれた文化であることの理解	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>①⑨総合芸術の多様性を理解し、尊重する態度</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「異なる文化を取り入れて新たな文化となった例を探し、発表してみよう。」
	様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性	・我が国や郷土の伝統音楽、諸外国の様々な音楽に対する特徴の理解	・様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性の理解	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>②⑩過去に築かれた音楽文化や伝統を尊重し、その持続発展に貢献しようとする力</p> <p>②⑪自他国の音楽文化を理解し合うために交流できる力</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「長い歴史をもつ奈良市大柳生町の『太鼓踊り』を鑑賞し、毎年行われていた『太鼓踊り』が休止となった理由を考えてみよう。」 ・「伝統文化を継承・存続させるために、あなたや、地域の人々ができることは何かを考え、話し合ってみよう。」
	音楽を共有するための音楽用語や記号	・音楽用語や記号の理解	・音楽用語や記号は、人間が時代や地域を超えて音楽を共有し、音楽文化の継承・発展を可能にさせるものであることとの理解 ・音楽用語や記号から作曲者の表現意図についての思考と解釈	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>②⑫自他国の音楽文化を理解し、互いの文化の価値などを尊重し合いながら交流できる力</p> <p>②⑬抽象化されたシンボルから具体、背景を想像する力</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「語学を学ぶことと楽譜が読めるようになることに共通することは何か、考えてみよう。」 ・「写真を見ることがより地図を見ることが、演奏を聴くことよりも楽譜を見ることが、両方に共通して育つ人間の能力は何かを考え、話し合ってみよう。」

4.2. 今後の課題

以下の5点が今後の課題となる。

第1は、表1に基づく授業実践と検証である。それを通してAdvanced Levelのさらなる精緻化と、実践から帰納されるESDの理論化を音楽教育の立場から進めなければならない。

第2は、Advanced Levelに対する評価の在り方の検討である。Advanced Levelは1時間の授業で実現が認められるとは限らず、また知識レベルではなく行動化されなければ実現は認められない。評価方法として、中学校3年間を見通したパフォーマンス評価やルーブリックの作成が必要になるものと予測する。

第3は、細分化された各々の指導内容についてではなく、それらが総体化されて育成される学力が持続可能な社会づくりに寄与する力とどう繋がるかも検討しなければならない。

第4は、表現領域についての検討である。ESDとしての音楽科教育の可能性を主張する時、本稿で扱った鑑賞領域のみでは不十分であることは言うまでもない。

第5は、インテグレーション・アプローチとして他教科や「総合的な学習の時間」との関わり、そしてホールスクール・アプローチとして学校全体の取組の中で音楽学習をどう関わらせていくかを検討しなければならない⁽²⁵⁾。ESDはシステムも含めて教育全体の改革を要請するものであり、この点も重要な課題であると考ええる。

注

- (1) 閣議決定(2013)「教育振興基本計画」, p.50
- (2) 文部科学省国際統括官付(2010)「持続発展教育(ESD)とは」『文部科学時報』, No.1608, p.23
- (3) 実践論文として報告されているものには、川合利幸(2009)「ESDをコンセプトにしたサウンドスケープへのアプローチ」『教育実践総合センター研究紀要』, 第18号, 奈良教育大学教育実践総合センター, pp.247-251や、川合利幸(2012)「ナンタをイメージした韓国音楽の指導」『教育実践総合センター研究紀要』, 第21号, 奈良教育大学教育実践総合センター, pp.155-158がある。しかしこれらは、それぞれ「ESDをコンセプトにした」「ESDの理念にもとづいて」と述べられているが、その指導内容やゴールが明確ではなく、その実践によって獲得された学力が持続可能な社会づくりにどのように貢献するのかという指導がなされておらず、ESDが求める理念が果たされた実践にはなっていない。結果的に、従来のサウンドスケープや韓国音楽を扱う授業との差異が見られない。一方、平成24年度全日本音楽教育研究会全国大会で公開された中学校授業「日韓の伝統的な歌唱教育を互いに学び合おう」(長野市立裾花中学校)は、日本と韓国の授業をインターネットによる遠隔システムで同時接続し、韓国の中学生や演奏者とともに「アリラン」を、日本の中学生や演奏者とともに「さくらさくら」を歌い、双方で批評し合ったり感動を共有したりするものであった。この実践がESDであるのだという位置づけは見られなかったが、異文化理解としてESDの理念を十分に

果たすものであった(『溪声』(2013), 第61号, 長野県音楽教育学会, pp.44-47)。

- (4) 前掲書, (1), p.39
- (5) ESD-J(2006)「ESDがわかる!」(冊子)におけるワークシート(2006年1月版)より。
- (6) 国立教育政策研究所(2012)『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究[最終報告書]』, p.9
- (7) http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/CLT/pdf/Seoul_Agenda_EN.pdf (2013.4.30確認)。
- (8) 資料1は、宮下の翻訳によるソウル・アジェンダの全文と、宮下が各項目のキーコンセプトを検討し、併記したものである。
- (9) 「インフュージョン・アプローチ」については、五島敦子・関口知子(2010)『未来をつくる教育 ESD 持続可能な多文化社会をめざして』, 明石書店, pp.110-112を参照されたい。
- (10) 「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って(理解して)聴き、言葉で説明するなど(根拠をもって批評するなど)して、音楽のよさや美しさを味わうこと。」「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて(関連付けて理解して)、鑑賞すること。」「我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽(我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽)の特徴から音楽の多様性を感じ取り(理解して)、鑑賞すること。」()内は第2学年及び第3学年の3項目。
- (11) 「音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を覚知し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること。」「音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号などについて、音楽活動を通して理解すること。」の2項目。
- (12) 文部科学省(2009)『中学校学習指導要領解説 音楽編』, pp.15-21
- (13) 同上書, pp.15-21の記述から抽出した。なお、[共通事項]に係る観点である、⑥音楽の構造の原理、⑦音楽的な感受、については、鑑賞領域に係る観点である、①音楽の素材としての音、②音楽の構造、③音楽によって喚起されるイメージや感情、の中に含まれるものとして捉えた。
- (14) 前掲書, (2), p.23に記載されている「学び方・教え方」でも、「単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探究や実践を重視する参加型アプローチとすること」と示されている。
- (15) 前掲書, (6), p.6
- (16) 注(14)と同様。
- (17) 日本学校音楽教育実践学会編(2012)「ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践」『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較』, 音楽之友社, pp.123-152
- (18) 同上書, pp.130-131
- (19) ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践を検討した中島卓郎は、検討を踏まえて日本における音楽科の課題として「人間にとっての音楽、生活における音楽という視座からも児童・生徒が思考を深めていくこと」を挙げている(同上書, p.149)。
- (20) 前掲書, (17), p.148 ()内引用者
- (21) 前掲書, (17), p.133
- (22) 例えば、「第4回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会—ESDの実践上の課題解決に向

けて一」(2013)でのテーマ別交流会や、丸山秀樹氏の講演「E S Dのこれから—『なんでもアリ』から基盤構築と意識化へ—」(奈良教育大学附属中学校教育研究会(2012)にて)で指摘が見られた。

- (23) 奈良教育大学・吉村雅仁 企画・監修DVD『複言語活動のすすめ』を参考にした。
- (24) 千住博(2010)「芸術とは何か」『W E D G E』, 第22巻, 第10号, 株式会社ウェッジ, pp.56-57
- (25) 「インテグレーション・アプローチ」と「ホールスクール

・アプローチ」については、注(9)と同様。

本論稿は、平成24年度～26年度科学研究費補助金「E S Dを目指す高等学校芸術科音楽のカリキュラムと実践事例の開発」(研究代表者 宮下俊也、基盤研究(C) 24531130)の助成を受けて行っている研究成果の一部である。

資料1 「ソウル・アジェンダ」の翻訳と各項目のキーコンセプト

Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education (2010.7.13)		キーコンセプト
ゴール 1	芸術教育を、質の高い教育改善を実現させるための基礎として、また持続可能性をもたせるものとして保障すること。	・教育改善と持続可能な芸術教育の重要性
1 a	芸術教育は、子どもや青年、生涯学習を受ける人々にとって、創造性、認識、感情、美的感性、社会性のバランスのとれた発達の基盤となるものであると断言する。	・芸術教育の理念
	(i) 政策及び(人的・物的)資源の配置を制度化・実施することにより、次の諸局面への持続的なアクセスを保障する。	
	(i)-1 -あらゆるレベルの学校で学ぶすべての学習者のための幅広く全体的な教育の一部として、すべての芸術領域における包括的な芸術学習。	・学校における芸術教育の普及
	(i)-2 -地域コミュニティにおける多様な学習者のための、あらゆる芸術領域にわたる学校外での体験。	・学校外における芸術教育の普及
	(i)-3 -学校内外における、デジタルや他の新しい芸術形式を含む学際的な芸術体験。	・学際的な芸術教育
	(ii) 創造性、認識、感情、美的感性、社会性といったそれぞれの成長発達による相乗効果を高める。	・芸術教育の理念の実現
	(iii) 芸術教育によって学習者の調和のとれた成長を保障するために、質の高い評価システムを確立する。	・芸術教育の評価システム
1 b	芸術教育を通して、教育システムと構造の建設的な変容を促進する。	・芸術教育を取り入れた新教育システムの構築
	(i) 芸術以外の学問分野において、芸術的、文化的側面を取り込んだ教育モデルの構築に取り組む。	・教育全般における芸術的・文化的側面の扱い
	(ii) 教師と学校管理者に対して、芸術教育を通して創造的な文化を築くよう促進する。	・芸術教育による学校文化の構築
	(iii) 芸術教育を適用したこれまでにない新しい教育学や、学習者の多様性を意識したカリキュラムの創造に取り組む。	・芸術を取り込んだカリキュラム開発
1 c	芸術教育において、芸術教育について、そして芸術教育を通して、生涯にわたる世代間の学習システムを確立する。	・生涯教育としての芸術教育システムの確立
	(i) あらゆる社会的背景をもつ学習者が、幅広いコミュニティや制度的環境において、生涯にわたって芸術教育を受けることができるように保障する。	・生涯教育としての芸術教育の保障
	(ii) 年齢層が異なる集団の中で芸術教育を受ける機会を保障する。	・異年齢間における芸術教育の保障
	(iii) 伝統的な芸術に関して知っておくべき事項を受け継いでいくために、年齢が異なる者同士の学習を助成し、世代間の理解を促進する。	・異年齢間と世代間学習による伝統的芸術の継承
1 d	芸術教育を指導し、支持し、そしてその政策を進展させるための力量を確立する。	・芸術教育の指導者養成
	(i) 芸術教育の政策立案過程において、周辺に追いやられた人々や恵まれない人々の集団の参加を含み入れた新しい芸術教育の政策改革を実現していくことのできる実践者と研究者の力量を形成する。	・社会的マイノリティーに対する芸術教育研究と実践者の養成
	(ii) 情報メディアとの関係を強化することにより、コミュニケーションと主張を拡充する。その際、意思疎通のために適切な言語を確立し、情報技術や仮想ネットワーク利用により国家及び地域における既存の構想を相互に結び付けていく。	・グローバルな視点を持つ芸術教育のためのコミュニケーションスキルの育成
	(iii) 芸術教育の価値に対する認識を高め、公的あるいは私的な場での芸術教育のサポートを促進するために、芸術教育が個人や社会にもたらす影響力を伝えていく。	・個人や社会に対する芸術の価値の認識と発信

ゴール 2		芸術教育活動とプログラムは、理念的にも実践的にも、ともに質の高いものでなければならない。	・ 質の高い芸術教育プログラムの開発
2 a		地域のニーズ、社会基盤、文化的背景に対応し、誰もが合意した質の高い芸術教育のスタンダードを開発する。	・ 質の高い芸術教育のスタンダード開発
	(i)	学校やコミュニティにおける芸術教育プログラムを供給するために、質の高いスタンダードをつくる。	・ 学校や地域コミュニティにおける質の高い芸術教育のスタンダード開発
	(ii)	芸術教育に携わる教師やコミュニティにおけるファシリテーターに与える正式な認定資格を制定する。	・ 芸術教育の指導者の資格・認定の制定
	(iii)	芸術教育のために必要となる適切な設備や資源を提供する。	・ 芸術教育のための設備・資源の提供
2 b		芸術教育における持続可能なトレーニングが、教育者や芸術家、コミュニティにとって利用可能なものであることを保障する。	・ 芸術教育における教育者と芸術家の質保障
	(i)	持続可能な専門技術学習の仕組みを通して、学校の教員（芸術専門であるなしに関わらず）、また教育に携わる芸術家に、必要な技能と知識を提供する。	・ 教員の芸術的質保障、及び芸術家の教育的質保障
	(ii)	教員養成のカリキュラムや実習生の職能開発の中で、芸術の原理と教育実践の統合を図る。	・ 教師教育における芸術教育の原理と実践の統合
	(iii)	教育評価指導やメンタリングなど、教育実践の質のモニタリング手順の開発を通して、芸術教育のトレーニングの実施を強化する。	・ 芸術教育のトレーニング
2 c		芸術教育における研究と実践との往還を活発にする。	・ 芸術教育における研究と実践の往還
	(i)	芸術教育の理論と研究を世界的に支援し、理論と研究と実践を繋ぐ。	・ 芸術教育における理論と実践との融合
	(ii)	芸術教育研究において連携協力を促進し、情報センターや監視所のような国際的な組織を通して、模範となるような実践や研究を広めていく。	・ 芸術教育の管理と支援機関の役割
	(iii)	芸術教育がもたらす影響について質の高いエビデンスをまとめ、それを公平に広めていくことを保障する。	・ エビデンスを携えた芸術教育の影響の候補
2 d		学校内外での芸術教育において、教育者と芸術家との協働を促進する。	・ 教育者と芸術家の協働の促進
	(i)	学校がカリキュラムに芸術家と教師との協力体制を積極的に取り入れようとすることを奨励する。	・ 学校教育における教育者と芸術家の協力体制の推進
	(ii)	地域コミュニティ組織が、様々な異なる学習環境での芸術教育プログラムにおいて、教師と協働することを奨励する。	・ 地域コミュニティにおける芸術教育への教師の参画
	(iii)	様々な学習環境の中で、保護者や家族や地域のメンバーを積極的に巻き込むような文化的项目を作り出していく。	・ 保護者や家族、地域メンバーによる文化的项目の推進
2 e		様々な利害関係者及び産業部門間で、芸術教育のための協力体制づくりを積極的に開始する。	・ 芸術教育のための異分野間協力体制づくりの開始
	(i)	社会における芸術教育の役割を強化するために、政府内あるいは政府の枠を超えて、特に、教育、文化、社会、保健、産業などの部門間でのパートナーシップを構築する。	・ 政治・経済界等の異分野組織との協働体制の構築
	(ii)	芸術教育の原理や、政策、実践を強化するために、政府、民間の社会組織、高等教育機関、専門的な学術団体の活動をコーディネートする。	・ 芸術教育推進のための官・民、教育研究機関等のコーディネート
	(iii)	財団や慈善団体などを含む私的な組織をパートナーとして、芸術教育プログラムの開発に巻き込む。	・ 私的組織との協働による芸術教育プログラムの開発

ゴール 3		芸術教育の原理と実践を、今日の世界が直面している社会的・文化的な課題解決に貢献するために適用する。	・芸術教育の社会的・文化的貢献
3 a		芸術教育によって、社会が潜在的にもっている創造性や革新性を高める。	・芸術教育による社会的創造性や革新性への貢献
	(i)	学校やあらゆるコミュニティでの芸術教育によって、個人の中にある創造的でこれまでにない新しいことを生み出そうとする潜在能力を育成し、また、創造的な市民としての新世代を育成する。	・市民の芸術教育による創造性の育成
	(ii)	芸術教育によって、ホリスティック（包括的）な社会、文化的で経済力のある社会に寄与するような創造的で革新的な実践を促進する。	・芸術教育によるホリスティックで文化的経済的に高い社会づくりへの貢献
	(iii)	クリティカルで創造的な思考の源として、コミュニケーションテクノロジーにおける新機軸を利用する。	・コミュニケーションテクノロジーの利用
3 b		芸術教育にある社会や文化の健全化を果たす特質を認識し、発展させる。	・社会や文化の健全性を果たす芸術教育の認識と発展
		(i) 芸術教育にある、以下のような社会や文化の健全化を果たす特質についての認識を促す。	
	(i)-1	－広範にわたる伝統的・現代的芸術経験の価値	・伝統文化や現代芸術の価値
	(i)-2	－芸術教育の療法や健康に関わる特質	・療法や健康に関わる特質
	(i)-3	－文化の多様性や文化間の対話を促進するだけでなく、アイデンティティや遺産を発展させ保護することのできる可能性	・アイデンティティや文化遺産の発展と保護
	(i)-4	－紛争や災害の後に、そこから回復させることのできる特質	・紛争や災害からの復興
	(ii)	芸術教育の専門家養成プログラムにおいて、社会や文化の健全化に関わる知識を身に付けさせる。	・芸術教育者養成における社会や文化の健全化の教授
	(iii)	学習者の教育への参加を増大し、教育から落ちこぼれていってしまうことを減らすために、学習の動機付けのプロセスとして芸術教育を適用する。	・学習の動機付けのための芸術教育の適用
3 c		社会的責任、社会的結束、文化的多様性、異文化間対話を促進する上での芸術教育の役割を高め、それらを支援する。	・芸術教育による異文化理解や異文化間交流
	(i)	学習者それぞれが持つ具体的な背景を理解することや、少数民族や移住者を含む学習者の地域との関連性に適応した芸術教育実践を促進することを優先する。	・学習者と地域の社会的背景の関連性に適応した芸術教育の促進
	(ii)	多様な文化的・芸術的表現についての知識や理解を促進し高める。	・異文化や芸術の多様性の理解
	(iii)	芸術教育のトレーニングプログラムを支援する中で、異文化間をつなぐ対話の技術、教授法、機材や教材を導入する。	・異文化間交流のためのスキルや教材等の提供
3 d		芸術教育を通して、平和から持続可能性に至る主要な世界的課題に対応する能力を育成する。	・平和や持続可能性に関わる世界的課題の克服への貢献
	(i)	環境、地球規模の移民、持続可能な開発など、広範囲にわたる現代社会と文化の問題を踏まえた芸術教育活動に焦点をあてる。	・芸術教育活動による現代社会が抱える問題へのアプローチ
	(ii)	芸術教育実践における多文化教育の側面を拡大し、世界的視野を持った市民性を育成するため、学習者や教師が異文化間交流することを活発にする。	・多文化理解や世界的視野の育成のための異文化間交流の推進
	(iii)	コミュニティにおける民主主義と平和を推進し、紛争終結後の社会の再建をサポートするために芸術教育を適応する。	・芸術教育による平和社会の構築